

# 北九州市立大学

## 文学部紀要

第84号

### — 目 次 —

「くだものいそぎ」とは何か

物語を動かす類型—観音利生譚の一形態と仮名本『曾我物語』卷三をめぐる—

仮名本『曾我物語』の五郎像と源義経—斬り合う太刀の象徴するもの—

渡瀬 淳子 …………… 1

北九州市立大学文学部

比較文化学科

2015

## 仮名本『曾我物語』の五郎像と源義経―斬り合う太刀の象徴するもの―

渡瀬淳子

### はじめに

父の仇を討つため富士野へ向かう曾我十郎・五郎の兄弟は、その途中、五郎が幼少時代を過ごした箱根へ立ち寄り、箱根権現の別当から「友切」という太刀を贈られる。別当は、兄弟たちに、頼光の作らせた太刀が様々に靈威を顯し改名を重ね、源氏一門に相伝され、最後に箱根に収まるまでを語る。仮名本『曾我物語』巻八「太刀刀の由来の事」であるが、五郎はその時授かった太刀で宿敵工藤祐経を討ち果たすため、物語中、重要な意味をもつ挿話であるといえよう。

この挿話については近年太刀伝承の側面から検証が行われ始めている\*1が、ここでは、箱根の太刀にまつわる伝承と、そのイメージや太刀をめぐる当時の共通理解が、仮名本においては曾我兄弟の敵討ちという事件をどう捉えるかという物語全体に関わる歴史認識や曾我五郎の人物造形にも影響しているという点を論じていきたい。なお、仮名本『曾我物語』の引用本文は、市古貞次・大島建彦校注『曾我物語』（日本古典文学大系 八八 岩波書店 一九六六年）を用いた。

### 曾我兄弟と頼朝

まず、曾我兄弟の敵討ちを仮名本がどのように脚色しているか述べておく必要があるだろう。それは仮名本の歴史認識ともいべき問題である。

仮名本には、源頼朝に至るまでの源氏の系譜と曾我兄弟が敵討ちに至るまでの伊東一族の歴史とを、重ねて捉えようとする認識がある。仮名本『曾我物語』は、神話的起源から語り起こされ、神から天皇家へ、天皇家から清和源氏へ、と繋げられていく。その系譜が頼朝に至るまでが物語の一つの括りとなっているのだ。曾我兄弟の敵討ちは源頼朝との関わり抜きには語れないという認識があるからであろう、物語世界の中心軸として、まず最初に頼朝に至る源氏の歴史、頼朝の台頭が描かれるが、頼朝に至る源氏の起源として、清和天皇の即位にまつわる「惟喬・惟仁の位争いの事」が語られる。惟喬・惟仁の兄弟は皇位をかけて相撲・競馬で勝負を行うが、それぞれに後ろ盾があり、御持僧がついて熾烈な調伏合戦をくりひろげ、惟仁の御持僧恵亮が自らの脳を砕いて護摩に焚くという激しい祈祷で勝利を得

た\*<sub>2</sub>、という物語である。負けた惟喬は蟄居し、ひっそりと生涯を終えたとある。

この話の直後に、曾我兄弟の悲劇の由来を語る「伊東を調伏する事」が置かれる。それは以下ような内容になっている。曾我兄弟の曾々祖父にあたる伊豆半島の豪族楠美入道寂心は、跡継ぎの男子を早く亡くしていたため、再婚相手の連れ子に自分の子供を産ませ、その事実を隠して生まれた子供を後継者とし、本領の伊東を継がせた。これが伊東武者祐継（工藤祐経の父）である。また、寂心には孫がいたが、その子を祐継の弟として、河津を相続させた。これが後の伊東祐親、曾我兄弟の祖父である。祐親は兄祐継が寂心の実子と知らないため、自分こそが正統な寂心の後継者であると信じて疑わず、本来なら跡取りであるはずなのに本領を相続できなかったことを深く怨んだ。祐親は祐継を亡き者にして領地を取り返そうと、箱根の別当に祐継の調伏を依頼し、その結果、祐継は病を得て死んでしまう。

真名本では、この伊東祐継の病氣と死はあくまで偶発的な出来事であり、そこに祐親がつけこんだとしている\*<sub>3</sub>が、仮名本はそれを祐親が箱根の別当をして調伏させた結果とし、意図的に兄を追い落としたとしている。このように設定することによって、仮名本の中では位争い説話と祐親の物語とが結びつく。兄弟間の争いで弟が勝利し兄が敗北していること、調伏（呪詛）による攻撃であることなど、物語の基本的な筋立てから、類型化された調伏の描写のような物語の細部に至るまで、二つの物

語はよく似ている。ここには仮名本の作為があるのではないだろうか。仮名本は類似するモチーフの物語を連続して配置することで二つの物語を混同させ、位争い説話と類似の物語として曾我兄弟の敵討ちの起源を語ろうとしているのである。

このことは、仮名本が、源氏の起源にも曾我兄弟の敵討ちの淵源にも同様に、身内同士の争いがあると捉えていることを表している。この身内同士の争い、骨肉の争いというテーマは仮名本『曾我物語』全篇を貫く基調となっており、特に箱根の別当から与えられた太刀が、それを象徴する役割を果たしていると考えられるのである。以下、太刀に付随する物語を検証していきたい。

#### 切り合う太刀

仮名本『曾我物語』には、箱根の別当から曾我五郎に与えられた太刀に関して、太刀同士が切り合いをしたという挿話がある。それは『平家物語』「剣巻」（以下、「剣巻」と略す。なお、本文の引用は屋代本『平家物語』附属「剣巻」を用い、句読点・濁点・鍵括弧・ふりがなは私に補った）などとも共通する話である。「剣巻」、「曾我物語」巻八「太刀・刀由来の事」、幸若「剣賛嘆」は、いずれも源氏重代の太刀を中心に太刀の改名と継承を語る、同一の主題を持つ物語であり、いずれの物語でも、太刀はその持ち主（継承者）の運命や行動に深く関わり、運命を司る役割を果たしている\*<sub>4</sub>。

まず、源氏の太刀が曾我兄弟の手に渡るまでを、上記三本の中で最も成立の古いと思われる「劔巻」によって概観しておきたい。「劔巻」では、源氏重代の太刀というのは、多田（源）満仲が作らせた「鬚切」「膝丸」という二振りの太刀である。

この二振りは神秘的な力を有し、持ち主の手元にあつて様々な靈威を見せ、そのたびに名を変えて受け継がれてゆく。重代の太刀は、二振りで一对のものととして代々清和源氏嫡流に継承されたが、為義の時に、「獅子の子（元の鬚切）」と対であつた「吠丸（元の膝丸）」を、娘である「たづはらの女房」の婚姻の引き出物として、婿となる熊野別当教真に与えて手放してしまつた。太刀が一振りになつてしまつたことを心許なく思つた為義は「獅子の子」と対になる太刀を作らせることにした。「劔巻」で当該の場面を見てみる。

為義、一具ニテ持タリケル劔ヲ引（ひきはなす）放タリケレバ、片手無様ニゾ覚ヘケル。無心（こころをなま）元マ、ニ、吉鍛冶ヲ召シ登セテ、獅子ヲ本ニシテ、少モ不違（あがはず）作（つく）トテ造ラセタリケルガ、殊勝ノ劔ナリケレバ、喜事（よろこぶこと）不斜（よこしま）。目貫ニ烏ヲ作リテ入タリケレバ、小烏トゾ名付タル。為義ハ、獅子、小烏トテ一具ニシテ持タリケルガ、今ノ獅子ノ子ニ不違（あがはず）作（つく）タリト思ヘドモ、二分計（はかり）長カリケレバ、心地悪ク覚ケルニ、或時（ふたつ）二ノ劔ヲ拔テ、障子ニ寄懸（よせかけ）テ立タリケルガ、人モサハラヌニ、カラト倒ル、音聞ヘケレバ、何ナル事ゾ、劔コソマロビヌレ、損ジヤシヌラントテ、急ギ見ケ

レバ、日来ハ二分計長シト思ツル小烏ガ、少モ其義ナクシテ、獅子ノ子ト同クゾ成リタリケル。「不思議ヤ、サルベキ様ヤアル、切レタルカ折タルカ」トテ、サキヲ見レドモ切モセズ。猶是ヲ怪ミテ、ツカヲ見ルニ、目貫ヲツキ折テサガリタリ。是ハ一定獅子ノ子ガ切タルト心得テ、獅子ノ子ヲ改メテ、友切トゾ付タル。（劔巻）

ここに、新しく誂えられた太刀として、「小烏」という名がみえる。周知のとおり、『平家物語』や『源平盛衰記』では「小烏」は平家の太刀として伝承されている\*<sub>5</sub>が、「劔巻」では源氏の太刀とされている。そして、その「小烏」を切つたことにより、「獅子の子」は「友切」と改名されたとある。友を切る、という不吉な名\*<sub>6</sub>を背負わされた太刀は、その後、為義から義朝を経て頼朝に受け継がれることになる。切られた「小烏」は義朝が討たれた後に平家の手に渡る\*<sub>7</sub>が、熊野別当教真に与えて手放した「吠丸」は、教真の子息湛増から義経に伝わり、義経が箱根権現に納め、箱根別当から曾我五郎に与えられ、曾我兄弟の敵討ちを経て頼朝の手に収まる。「劔巻」では、満仲の代に作られた二振りが、一对のものとして主人の手元にあることが重視されている\*<sub>8</sub>。

しかし、仮名本『曾我物語』では、二振り一对の太刀を相伝するという「劔巻」の構想は失われていた。『曾我物語』で箱根の別当は「此の太刀と申すは、昔頼光の御時、大国よりぶあく大夫と言ふ莫耶を召し、三ヶ月に作らせ、一月にみがかせ二

尺八寸に打ち出だす。秘蔵並ぶ物無くして持たれける。」と語り始める。満仲ではなくその息子の頼光が作らせた太刀であるという部分からして異なっている\*<sup>9</sup>が、何よりも対になる太刀の存在が語られていないことが大きな違いである。別当は五郎に与えた一振りの太刀についてのみ、「てうか」「虫ばみ」「毒蛇」「姫切」「友切」と名を変えた経緯を語る。

この太刀について、二振り一对のものとして作られたという「剣巻」的枠組みを無視する理由は何だろうか。源氏の宝剣説話は「剣巻」をはじめとして広く知られていたと思われるが\*<sup>10</sup>、五郎の手に渡る太刀の名を、骨肉の争いを連想させる「友切」とするためではなかっただろうか。源氏の刀剣伝承が流布する言説空間の中で「剣巻」の構想を踏襲すれば、五郎の手に渡る太刀は「友切」ではなくなってしまうからである。ではなぜ物語の構造を変えてまで五郎に「友切」を持たせたかったのか。それは太刀同士の切り合いという物語が、五郎の佩刀を彩る物語として必要とされたからだ、と今は考えてみたい。箱根の別当の語りは次のように続く。

…其れより、六条の判官為義のもとへ譲られたる。其れにての奇特には、此の太刀に六寸ばかり勝りたる太刀を立て添へて置かれたり。夜に入りぬれば、切り合ひける。判官、此の由聞き給ひて、予てより様有る物をとて、五夜までこそ立て添へて置かれけれ。五夜の間、隙無く戦ひて、六夜と申すに、我が寸に勝りたるを、安からずと思ひけん、

余る六寸を切り落とす。然れば、友切と名付けて、持たれたり。

「剣巻」で「獅子の子」が「小鳥」を切ったのと同様の物語がここにはある。しかも、その後「友切」と名付けられた鬚切は、その不吉な名が示す通り、保元・平治の乱において身内の処刑に用いられることになったとしている。これも「剣巻」と同様である。仮名本『曾我物語』では、その因縁の太刀「友切」が曾我五郎の手に渡って、父の敵であり親戚でもある工藤祐経を切るに至るのである。祐経と祐親以来、同族内で争い血を流すことを繰り返した伊東の一族、特に五郎の太刀に、身内同士の争いという因縁を纏わせるためには、どうしても太刀が切り合うという挿話が不可欠だったのだ。

他方、同じく「剣巻」などの源氏宝剣説話の影響下にある幸若「剣賛嘆」では、太刀の切り合いとともに切られた太刀が「義経の手を経由して」五郎に伝わるというもう一つの傾向が浮かび上がってくる。「剣讃嘆」は天竺の霊威ある鉄で作った長刀が日本に渡り、平城帝の命によって二振りの太刀に作り直されるところから物語が始まる。長刀はそれぞれ舞房・小鍛冶という当代きつての名人に預けられ、太刀に作り変えられた。しかし、小鍛冶が打った太刀は、舞房の太刀よりも制作に時間がかかった上に短かったため、小鍛冶は材料の鉄を盗んだ疑いをかけられ牢に入れられてしまう。小鍛冶は盗人とされた上、自らの作った太刀も低い扱いを受け、悔しさのあまり神に祈る。

すると小鍛冶の太刀は舞房の太刀に斬りかかり、二振りの太刀は斬り合いを始めるのである。

…さる間、舞房が打つたる太刀をば、枕上と名づけて、一段上に立てられたり。小鍛冶が打つたる太刀をば寸なしと名付けて、一段下に立てられけり。小鍛冶あまりの無念さに、「南無や九万八千の鍛冶の神たち、小鍛冶が誤りなき所の、その徴を見せ給へ」と、非涙涕泣し、肝胆を碎き、祈りければ、まことに鍛冶の守護神も納受ありけるか、寸なし、鞘を外れて枕上にながれ懸て、ちやうど切る。舞房が打つたる太刀も、化生の鉄にてある間、鞘を外れて渡り合ひ、追うつ捲つつ、さんぐに戦ふたり。御殿の内振動す。御門を始め奉り、公卿、大臣、「これはいかなる物の怪ぞ」と怪しめ給ふところに、寸なしと枕上、鞘を外れて、戦ふたり。御門叡覧ましぐ、「こなたは枕上か、あなたは寸なしか。あれはいかに」とおほせ有、御目を覚ますばかりなり。やゝもすれば、枕上は受け太刀になりてぞ廻りける。猶も、寸なし、無念にや思ひけん、とある所へ追つ詰め、我丈にたち比べ、切つ先三寸切つて捨て、元の鞘にぞ納まりける。御門叡覧ましぐて、寸なしを引き変へて、友切に官をなる。（『舞の本』岩波新日本古典文学大系）

その後二振りの太刀は満仲の手に渡り、小鍛冶の太刀は鬚切、舞房の太刀は膝切と名を変え、相伝されてゆく。「剣巻」と同様に鬚切と命名された太刀は義朝へ、後に蜘蛛切と名を変えた

舞房の太刀は熊野別当の手を経て義経へ伝わり、箱根へ奉納される。そして小鍛冶に切られた舞房の太刀が五郎に与えられるのである。

「剣賛嘆」では、友切の太刀で源氏が身内を討つことは語られない。しかし、元々平城天皇の宝であった太刀が天皇の手元で斬り合い、それが源氏へ相伝される構成になっている<sup>\*)11</sup>。同土討ちの要素が天皇家から切り離され源氏へ引き継がれたとも読めよう。

ところで、太刀が斬り合うという話は読者の好奇心を誘ったのか、その他にも太刀が斬り合いをした話がみられる。刀剣伝書<sup>\*)12</sup>と呼ばれる、刀剣についてその鍛冶や特徴、伝説など総合的な情報を纏めた一群の書物の中には、「剣巻」や仮名本『曾我物語』と重なり合いながらまた違った展開をみせる説話が見いだせる。以下、いくつかを紹介したい。

助包 備前也。…（中略）…鬚切は伊予殿所持なり。太刀今一作そえて持たんと思召して、伯耆国より鍛冶をめされて作らせられたり。この太刀鬚切より少し延びたりとこのにかつて思召されけり。或日、日中ならべかけて置き給うに、轟鳴るをみれば、寸同じ長さになりけり。それより友切とぞめされける。かの太刀城奥州持ちたりしを討死の砌焼けたりけり。頭殿を是をめて行次に焼き直させて大將殿御願法華堂におさめらる。又一の切れたる太刀は九郎判官殿箱根の御山に是を進ぜられしが、後別当曾我五郎に

とらせて敵あまた討ちたりける。兵庫鎖の太刀是なり。其後頼朝公御手元に納まる。『喜阿弥本銘尽』（『喜阿弥本銘尽』本間薰山翻刻『刀剣美術』一二三〜二三三号）

『喜阿弥本銘尽』の破線部分は、経緯は少々異なるものの、「劔巻」において「鬚切」が新しく作られた「小鳥」の太刀を切った、というのに重なる。そして傍線部分を見ると「鬚切」に切られた方の太刀が義経を経て五郎に伝わった太刀だとしている。同様の説は他の伝書にも見られる。

行重 号舞草ト 此作ノ太刀スエホソクウスシ 三峯ニ作シ 中コハツチメ也 コトニ此作ノ太刀一フリ新ヒケキリトナツケテ源氏ニコレヲモツ 彼實次力作ヒケキト云太刀ニ キツサキヲ切ヲラレテ 後ニモトノコトクワイヒタリケレハ ソレヨリ若草トナツケテ義家指之 子息六条判官為吉コレヲ傳ヘ 子息下野守傳之 義朝傳之 其後義経箱根ノ御山ニコメラル 別當曾我五郎ニコレヲヒク 此太刀ニテカタキノスケツネヲ切ケリ 其後此太刀ヲ頼朝ニメサレテ嫡子頼家ノ御舎弟實朝ニセツカイセラレテ後 頼家ノ子息悪房丸コレヲ傳ヘ 父ノカタキ叔實朝ノ此太刀ニテキラレ給ケリ『鍛冶名字考』（『鍛冶名字考』天理図書館善本叢書『古道集 一』）

『鍛冶名字考』では実次作の太刀と行重（舞草）作の太刀が切り合いをして行重作の太刀が切っ先を切られたとあり、これは幸若「劔賛嘆」で舞房と小鍛冶の太刀が切り合いをして舞房の

太刀が切られたとあるのを想起させる。ここでもやはり、切られた方の太刀が義経の佩刀とされ、その太刀で五郎が父の仇を討ったとされている。

こうした太刀をめぐる言説の中で、切られた太刀が義経に伝わりとするのは、兄である頼朝に討たれた義経のあり方が、同じ持ち主の下で仲間切られた太刀に象徴されているからではないかと考える。そしてそれは一族内で敵討ちを果たし非業の死を遂げた曾我兄弟の運命とも重ね合わされていたのだろう。

「劔巻」は切られた方の「小鳥」の太刀が平家に渡ったとしており、仮名本『曾我物語』は切った方の太刀が五郎に与えられているので、厳密に言えばこれら伝書の言説とは重ならない。幸若の「劔賛嘆」が部分的に重なるが、影響と呼べるほどのものではない。だが同じ持ち主の手元にある太刀が切り合うという物語は、一族同士で争った源氏の歴史を象徴しており、やはり同じ一族同士の争いに端を発する曾我兄弟の仇討ちに象徴的に重ね合わされていると見てよいだろう。

さらに『鍛冶名字考』では、この太刀が五郎の敵討ちの後に頼朝の手に渡り、更にその後、公暁が実朝を殺害するのに用いたとなっており、敵討ちにまつわる太刀として新たな物語が展開されている。そこには父（頼家）を叔父（実朝）に殺された子（公暁）が父の敵を討つという物語があり、公暁による実朝暗殺事件を「曾我兄弟の仇討ちになぞらえて」とらえるという歴史認識が濃厚にある。本稿の冒頭で仮名本には源氏の歴史と



曾我兄弟の歴史を重ねて捉える認識があると述べたが、『鍛冶名字考』のような説が存在するということは、やはり、曾我兄弟の敵討と頼朝に連なる清和源氏の歴史を重ねて捉えるという理解の仕方が、仮名本の外にもあることを示しているものと言えよう。

とはいえ、こうした伝書と仮名本『曾我物語』との関係はあくまで間接的なもので、直接的な書承関係などは認めるべくもない。曾我五郎の太刀をめぐっては、「剣巻」などの伝承を下敷きとする共通の知識的基盤を有する文化圏があり、そこではイメージは絶えず物語の内外を重層的に往還し、相互に影響を与え、共通概念というべきものを創り上げていったと思われる。共通概念の中では、五郎の太刀には、仮名本の外部で醸成された同士討ちの物語と、非業の死を遂げた源義経のイメージが付帯しており、両者は太刀を媒介に不可分に結びついているのである。

## 義経と五郎

五郎の佩刀についても少し追いかけてみたい。それは五郎の太刀には、先に触れたように、義経の影が見え隠れするからである。源義経と曾我五郎時致の生涯には類似点が多い。幼時に父が非業の死を遂げていること、幼少期を親元から離れて寺院で過ごし、僧侶となることを期待されながらも元服したこと、父の恥を雪ぐために一生をかけたこと、目的を達成した後には自

らも非業の死を遂げたことなどが主要な類似点である。さらに付け加えれば、兩人とも頼朝によって疎外されたことも挙げられよう。この兩人は『曾我物語』の内でも外でも象徴的に重ね合わせて語られる。それは五郎の太刀をめぐる物語において顕著に現れる。

「剣巻」では、一度源氏の手を離れた太刀が、義経を経由して五郎の手に渡り、五郎が敵討ちで用いて頼朝の手に戻ると叙述されている。

…サテ、九郎大夫判官義経ハ、平氏ノ生取ドモ相具シテ関東ヘ下向セラレタリケルガ、梶原讒言ニヨテ腰越ニ関ヲスヘテ鎌倉ヘハ不<sup>(いれられず)</sup>被入。判官無本意事ニ思テ、起請文ヲ書キテ度々進セケレドモ不<sup>(もつされず)</sup>被申。判官不<sup>(ちからわらず)</sup>及力シテ空ク帰上ラントスル時、薄緑ノ剣ヲ箱根権現ニゾ被進ケル。サレドモ神ノ聞入給ハム<sup>(マ)</sup>時ニヤアリケン、其駿モ無リケリ…  
(中略)…兄弟ノ中モ不直物故ニ、剣ヲ箱根ヘ進ラセザリセバ、カ程ノ事ハ有ラン物ヲト人々申逢ケリ。建久四年五月二十八日ノ夜、相模国ノ住人曾我十郎助成、同<sup>(おなじく)</sup>五郎時宗、親ノ敵公藤左衛門尉助経ヲ討レケル時、五郎、箱根ノ別当行実ガ手ヨリ兵庫鎖ノ太刀ヲ得テケレバ、思フサマニ親ノ敵討チテムゲリ。此太刀ハ、九郎判官ノ権現ニ進セタリシ薄緑ト云剣ナリ。昔ノ膝丸是也。目出度<sup>(めでたき)</sup>剣ナリ。親ノ敵ヲ心ノ俣ニ討<sup>(うちおこせ)</sup>仰テ、日本五畿七道ニ名ヲ得テ、上下万人ニ讃ラレケルトゾ承ル。其後彼膝丸、鎌倉殿ニ被<sup>(あされ)</sup>召



ケリ。鬚切・膝丸一具ニテ、多田満仲八幡宮ヨリ給テ、源氏重代ノ劔ナレバ、暫ク中絶スト云トモ、終ニ一所ニ経回シテ、鎌倉殿ヘ渡リケリ。希代不思議ノ劔也。

この部分は丁度、仮名本『曾我物語』巻八で箱根の別当から「義経」一九の年、兵衛佐殿謀叛をおこしたまふときこしめし、鎌倉に上り、見参にいり、幾程なくして、西国の大將軍にて、発向せられけるに、今度の合戦にうちかたせ給へとて、此御山へまいらせられたまひて候」と説明されている部分に相当する。奉納されたのが兄弟の仲直りを祈念してか、西国での戦勝祈願のためかという違いはあるが、義経の佩刀が箱根を経由して五郎の手に渡ったという物語の大筋は同じである。ここに見られるような、義経の太刀が箱根に奉納される経緯についても刀劔伝書に仮名本と類似の説が見いだせる。

義経が箱根に奉納した太刀を五郎が手に入れたとしている「長円」という鍛冶の項を見てみよう。これは仮名本『曾我物語』とも一致する。

長圓 めいには圓の字をさうに圓とうつ つるきにほんし<sup>(梵字)</sup>  
かく うすみとりのさくなり このさくの太刀 右大將頼朝御おとゝ九郎はんくわんよしつね へいけついはつのた<sup>(マヤ 西国力)</sup>めに さくこくへさしつかはされしとき すいふん御ひさうとてまいらせらるゝ 御むさうの子細により はこねのこんけんへまいらせ給ふを へつたう申しおろして そかの五郎時宗にこれをいたす この太刀にて けんきう四ね

ん五月廿八日ニ くとうすけつねをうつ このさくよにまれなり『三好下野守本能阿弥銘尽』(『鍛冶銘尽』内閣文庫蔵\*13)

長円を作者とする説は、義経が箱根に太刀を奉納した理由を、平家追討のため西国へ派遣されたからとしている。これは、奉納の理由を、梶原の讒言によつて隔てられた兄頼朝との仲直りのためとする「劔巻」や幸若「劔賛嘆」の説とは異なっており、仮名本『曾我物語』に合致する。また、熊野別当湛増から義経へ太刀が返されたとする「劔巻」とは異なる、義経が鞍馬の毘沙門天(多聞天)から太刀を授かったという仮名本の説\*14も銘尽中に確認できる。

友成 備前国住人 ……九郎判官義経 鞍馬多門天より感得之 金作太刀此作也…『利永本銘尽』(『梁氏正長銘尽』)

刀劔博物館蔵)

友成 備前国住人 ……九郎判官義経 鞍馬寺多門天ヨリ感得之 金作太刀此作也…『伊勢貞親本銘尽』(『宇都宮銘尽』安来市和銅博物館蔵)

友成 ……九郎判官義経 くらまたもんでんより 平家能登守教経所持同作也『鍛冶銘集』(『銘尽正安写本』刀劔博物館蔵)

友成作 ……又ミナモトノヨシツネ クラマノ毘沙門□□ヨリ給太刀モ タカクラ此作也…『直江本銘尽』(『古劔銘』刀劔博物館蔵)

友成 ……九郎判官義経 鞍馬山の多聞天より感得の金作の太刀 此作なり『喜阿弥本銘尽』

但し、伝書ではこの友成作の太刀が五郎の手に渡ったとは書かれてはいない。だが、仮名本『曾我物語』が、義経の佩刀が鞍馬寺にあったという説を踏まえているのはまず間違いない<sup>\*15</sup>だろう。これらの説の他に五郎が箱根の別当から太刀をもらったということを書き記さないものもある<sup>\*16</sup>が、曾我兄弟の伝承などを通じて、五郎が敵討ちの前に箱根の別当から太刀を授かった話は既に人口に膾炙していたことだろう。箱根に納められていた太刀が、奉納されるに至る経緯には様々な説があったとしても、元は義経の佩刀だったことも広く認知されていたのではないか<sup>\*17</sup>。

以上で紹介した他にも、五郎の太刀の作者として名の挙がった鍛冶が複数いる<sup>\*18</sup>。最後に、彼らの項にもはつきりと箱根の別当から五郎の手に太刀が渡されたと記されている事実を挙げておこう。

我里 義家下向時力父賜之 後判官進之 箱根別當曾我五郎『佐々木本銘尽』

伯耆国鍛冶事 真守 安綱子 大原真守打之 嵯峨天皇第十四勝宮皇子御剣作之 亦拔丸作之 目貫穴上峯二寄テ銘打 箱根別當曾我五郎時宗遣太刀此作云事アリ 亦平家重代拔丸二尺七寸此造ナリ『佐々木本銘尽』

こうしてみると、義経の佩刀が、後に五郎が父の敵を討った

太刀となったという刀剣伝書の記述や、仮名本『曾我物語』の説は、文字化されなかったものも含め、中世に広く流布していた曾我兄弟伝承の享受の上に成り立っているものと推察される。その中ではやはり、五郎と義経は重なり合いながら存在していたのだろう。先に義経と五郎はその生き様がよく似ているといったが、彼らにまつわる伝承は、仮名本『曾我物語』の内外を行き来しながら、二人のイメージを重ね合わせてゆく。そして箱根に奉納された一振りの太刀を媒介として、義経と五郎を結びつける。そうであれば、五郎が祐経を討ち果たした後、その太刀を帯びて頼朝の御前へ踏み込んだことの意味<sup>\*19</sup>は重い。

#### 否定される殺意

『曾我物語』は真字本・仮名本ともに五郎が頼朝の御所に踏み込んだことを偶然としている<sup>\*20</sup>。仮名本の本文では、五郎に迫られた堀藤次が「よそゑにげては、かなはじと思ひけん、御前さしてにげにけり。」とあるのを追って踏み込んだとしている。その後捕らえられた五郎は頼朝と対面する。頼朝から「頼朝を敵と思ひけるか」、「頼朝をば何とて敵と思ひけるぞ」と繰り返される問いかけに、五郎は「千万人の侍よりも、君一人をこそ思ひかけたてまつりしかども」、「自業自得果とは存じ候へ共、伊藤入道が謀叛により、我らながく奉公をたやすのみならず、子孫の敵にてはわたらせ給はずや。又は、閻魔王の前にて、日本の將軍鎌倉殿を手にかけて奉りぬと申さば、一の罪や

ゆるさるべきと、随分うかゞひ申て候つれ共」と答えている。しかし、それまで頼朝に対する曾我兄弟の恨みを一切語らない仮名本のこうした五郎の恨みの言葉は、閻魔王の前で頼朝を討つた事実を自らの名誉とするためという動機と相俟って、いかにも取って付けたかのような印象を与える。仮名本は、それを更に頼朝の言葉で「これ聞候へ。日来は、さらに思はぬ事なれ共、今、頼朝にとわれて、当座のかまへのことばなり。」と否定してみせる<sup>\*21</sup>。こうして幾重にも五郎の恨みの存在を否定せねばならなかったのは、五郎が義経の太刀を帯びていたことと関わりがあるのではないか。仮名本が五郎の恨みをどれほど無視しつつけても、『曾我物語』の外には、五郎が最初から頼朝までをも殺傷の対象としていたという幸若「十番切」のような作品が確かに存在していた<sup>\*22</sup>。それは当時の読者たちが、「五郎は頼朝に恨みを抱いていた」という共通理解を有していたと考えられるからに他ならない。むしろ、そのような共通理解の上に物語を組み立てているからこそ、『曾我物語』は、五郎の殺意を否定しなくてはならないのであろう。五郎の恨みを無化すること、それは暗に義経の恨みをも無化することになるのではないか。

仮名本には、頼朝の周囲から、同士討ちの要素を周到に排除しようとする傾向がある。頼朝は、他の多くの物語言説の中でも、その為政者としてのあり方を非難されることは希である。仮名本にも頼朝を非の打ち所がない君主として描こうとする姿

勢が強く見られる。仮名本の頼朝は流人時代であっても東国の武士たちの上に君臨し、真字本の頼朝のように惨めで無力な流人としては描かれない。かつて幼い曾我兄弟に対して加えられた苛烈な仕打ちについても「めいてんの君は、時に蔽壅の累をなし、しゅんゑんの臣はしば／＼しんしのかなしみをいだく<sup>\*23</sup>」という一言を付け加えることで、頼朝の残酷さを和らげようとしている。こうした頼朝の美化は、曾田実<sup>\*24</sup>が述べていたように、頼朝の周辺から因果と怨念の連鎖を断ち切ろうとする意識と関係があるかもしれない。

こうした語り手の意図と、物語の外に広がる共通理解との間で妥協点を探ったのが仮名本の形なのではないだろうか。あくまで頼朝を無傷に保とうとする一方で、巧みなイメージの操作によって、五郎や義経らの抑圧された者達の恨みを掬い上げ、物語に組み込んでいるのである。

## おわりに

以上縷々述べてきたような複雑なイメージの操作が、仮名本にはなぜ必要なのだろうか。それには、仮名本が物語の内外にある共通理解に大きく依存しながら物語を組み立てているという、仮名本そのものの性質の問題があるように思う。仮名本は曾我兄弟の敵討ちをアナロジーによって語ろうとしている。ある時はそれは斬り合う太刀に象徴され、ある時は源義経の悲劇と重ね合わせられる。アナロジーによる語りは「何か」を語る

ために類似する（と思われる）「何か」を呼びこむ。それは無限に続く連想の鎖となつて、物語を繋げていく。その営みを支えたのは、諸注釈やその他膨大な言説の流れ込む巨大な知の海と、その上に張り巡らされた連想の網である。『曾我物語』は文学・演劇作品などのテキストとして存在するもののみならず、書き残されなかった伝承も含めて〈曾我物語〉という一つの大きな世界を形成していたと思われる。その中には様々な言説が混在していて、ある物語を語ろうとすると類似の何かが殆ど反射的に連想され引き出されてくる。真字本・仮名本『曾我物語』の他にも数多存在する所謂「曾我物」のあり方を考えるとき、それらの多くが敵討ちの乱闘を中心に、あとは断片的なエピソードの寄せ集めであることから「曾我兄弟の敵討ち物語」の大筋（生い立ちや敵討ちに至る経緯、その人間関係など）は読者の共通理解の中にあつたと想定できる。この共通理解の及ぶ範囲はかなり広がつたと思われる。近世の歌舞伎における曾我物の大流行は、広義の〈曾我物語〉が国民文学というか、日本人の基礎教養ともいふべき拡がりを持つていたことから起こつた現象ではないだろうか。『曾我物語』を書く・読む、「曾我物」を創る・享受するという行為は、その共通理解を踏まえた上で物語をいかに飾るかという魅力的な行為であり、時に物語の構造すら破綻させかねないほどの自由とエネルギーをもつた行為だったのである。

\*1 鈴木彰「源家重代の太刀と曾我兄弟・源頼朝―『曾我物語』の中の「鬚切」「友切」―」（武久堅編『中世軍記の展望台』和泉書院 二〇〇六年）で、『曾我物語』関連の太刀伝承の問題点が詳述されている。

\*2 この位争いの説話は中世に広く流布したものであり、特に惟仁についた惠亮の激しい祈禱を表した「惠亮碎（破）脳」という語がたびたび中世の作品に見られることから、説話の影響の大きさが諒解される。今成元昭「惠亮破脳・尊意振剣」の成句をめぐって」（二）・（二）（『立正大学文学部論叢』七号 一九八三年二月／『立正大学人文科学研究所年報』二一号 一九八四年三月）などに詳しい。なお、黒田彰によつて古今集注釈にも採録されていることが報告されている。

\*3 真字本「：されば、当時の如きは上は兄弟の様なれども二人の中、内々は快からずとぞ聞こえし。上には親しき様に云ひ昵びたれども内々は不快して過ぎにける程に、伊藤武者助継生年四十三と申す夏のころ、狩庭より帰る道にて重病を受けて日数を経るままに、いよいよ重くなる間、：」とあり、祐親の呪詛などは一切描かれていない。この偶発的な機会に乗じて助継（仮名本では「祐継」）の子息金石（後の工藤祐経）の後見人となつた祐親は、その立場を利用して領地を横領したのである。

（青木晃・池田敬子・北川忠彦『真字本 曾我物語』一 東洋文庫 平凡社 一九八七年）

\*4 「劍卷」の刀劍伝承は、刀劍と家の興亡を関連づけて語る物語である、という認識は白崎祥一（『軍記物語における刀劍伝承の展開』『中世説話とその周辺』所収 明治書院 一九八七年）で既に示されており、定説化している。

\*5 『源平盛衰記』には平家重代の「小鳥」「抜丸」という太刀の伝承が記され、『平家物語』巻三「無紋の沙汰」にも平家重代の太刀として「小鳥」の名が見える。刀劍伝書類も主に『源平盛衰記』と同様の説を採用しており、「小鳥」は平家重代の太刀というのが当時の一般的な認識だったと思われる。

\*6 「劍卷」で、敗走する義朝が八幡大菩薩に祈ると、夢に八幡大菩薩の託宣があり、「…汝力持所ノ友切ト云劍ハ、満仲カ時、我力得サセタリシ劍也。鬚切、膝丸トテ、始ノマ、ニテアラハ、劍ノ用モ失セマシキヲ、次第二名ヲ付替テ、劍ノ用モ失タル也。殊更此度友切ト名ヲ付ラレテ、敵ヲハ不冤シテ、友ヲ切劍ト成也。保元為義力被討、子トモ皆ホロホサレシモ、友切ト云名ノ故也。又此度軍ニ負ツルモ、友切ト云劍ノ咎メナレハ、全ク我ヲ不可恨。」と告げられたとあるように、もともと持ち主を守護する太刀が、改名によって「友（味方）を切る」不吉な太刀となってしまったことが語られている。

\*7 「劍卷」には（義朝）尾張州野間ノ住人長田ノ庄司忠宗カ許ニ至テ、平治二年正月一日ノ主従二人、忠宗ニ討レニケ、リ。忠宗ハ義朝ニハ重代ノ良従、正清ニハ姑也。相伝ノ主ト髯トヲ討テ、世ニアラント思ヒケルコソウタテケレ。忠宗ハ主従

二人ノ頸ヲ取り、小鳥ト云太刀ヲ取具シテ、都ニ登リ、平家ノ見参ニ入テンケリ。夫ヨリシテソ小鳥ハ平家ノ宝トハ成ケル。」とある。元は源氏の太刀であったこと、平家に伝わったのが切られた方の太刀であることは、後に頼朝によって平氏が滅ぶことを暗示しているのかもしれない。

\*8 満仲が作らせた二振りの内、為義が片方を手放してしまつたために一振りしか受け継げなかつた義朝の代は、源氏の最も不運な時期として描かれている。「劍卷」では、太刀相伝のあり方と持ち主の運命が関連づけられており、頼朝の代に元々の二振りが手元に揃うことで、再び源氏に栄華の時代がおよぶれたことを象徴している。

\*9 「劍卷」で満仲から源氏の歴史を語り始めるのは、その後土蜘蛛退治譚で活躍する頼光を頼朝に至る源氏の系譜に組み込みたかつたからではないかと考えられる。頼光は頼朝の祖先頼信の兄に当たり、親から子へという「劍卷」の基本的な相伝の仕方では、満仲に遡らなければ頼光は系譜から外れてしまう。また、頼光を物語に組み入れたことにより、頼光の部分だけ頼光（伯父）から頼義（甥）へという例外的な相伝になっているのである。仮名本『曾我物語』では、その辺りの整合性はあまり重視されていないらしい。中世において頼光がいかに人気者であつたかがうかがい知れる。

\*10 注1の論文による。

\*11 太刀を作れと命じ、小鍛冶の太刀を「友切」と命名したの

は「奈良の御門」即ち平城天皇となっているが、平城帝はかの在原業平の祖父にあたる。業平と惟喬親王の贈答歌をめぐって位争い説話が述べられていた古今注の例を想起するまでもなく、ここには位争い説話がそれとなく隠されているように読める。つまり、天皇家も、そこから発した清和源氏も、本質的に同士の討ちの傾向を抱えているということが仄めかされているのではない。

\*12 「刀剣伝書」は、刀剣やその製作者である刀鍛冶について、特徴や伝承、値段など、刀剣の鑑定に必要な知識を集めた書物であるが、近世より前の古いものでは、伝説を多く載せたり太刀の模様や傷による吉凶占いなどを記したりする傾向がある。概ね内容は諸注集成的で、矛盾する説も排除せず載せているものが多い。本論で紹介した『佐々木本銘尽』などは性格の異なるいくつかの銘尽を纏めた物と考えられているが、それは中世の刀剣伝書全体の傾向とも言える。最も古い観智院本『銘尽』が応永年間に書写されているが、この本もまた、いくつかの銘尽を取り合わせたような構成になっている。

\*13 同系統の伝書である『宮元盛本能阿弥銘尽』（『能阿弥本正銘尽』刀剣博物館蔵）もほぼ同様。「長圓 銘ニハ圓ノ字ヲサウニ円 カクノ如シ 劍梵字ヲカク ウスミトリノ作也 此太刀右大将頼朝御弟九郎判官義経 平家追討ノタメニ 西国へサシツカハレシ時 スイフン御秘蔵トテ進ランケルヲ 御夢想ノ子細ニヨリテ 箱根権現エ参賜ヲ 別當申ヲロシテ 曾我ノ

五郎時宗ニ是ヲイタス 此太刀ニテ 建久四年五月廿八日 工藤祐経ヲ打 此作世ニ希也」

\*14 卷八「太刀刀由来の事」に「義朝の末の子九郎判官殿、いまだ牛若殿にて、鞍馬の東光坊のもとに、学文しておはしけるが、いかにして聞給ひけん、折く、毘沙門にまいり、「帰命頂礼、ねがはくは、父義朝の太刀、此御山にこめられて候。父の形見に、一目見せしめ給へ」と、祈念申されければ、多聞、あわれとやおぼしけん、この太刀をくだしたまふと、夢想をかうぶり、よろこびの思ひをなし、いそぎまいりて見たてまつり給へば、現に御戸ひらき、此太刀あり。」とある。

\*15 仮名本では、義経の父義朝が鞍馬に納めた太刀を、後に義経が鞍馬寺へ入り、毘沙門天に祈つて授かったとしている。「折く 毘沙門にまいり、「帰命頂礼、ねがはくは、父義朝の太刀、此御山にこめられて候。父の形見に、一目見せしめ給へ」と祈念申されければ、多聞、あはれとやおぼしけん、この太刀をくだしたまふと、夢想をかうぶり、よろこびの思ひをなし、いそぎまいりて見たてまつり給へば、現に御戸ひらき、この太刀あり。」

\*16 作者を「助平」とする太刀の伝承は上述のような箱根権現に関係した説をもっており、おおむね記述も簡略なものとなっている。「助平 備前国住人助平ト打 中子ハ切ヤスリノチトスチカウ 銘ハ目抜穴ノ上ニ打 曾我五郎時宗力親ノ敵ヲ打タル太刀ヲ造也 中子崎ソトハ頭也」『長享銘尽』（国立国会図書



館蔵)、「助平(一条のいん 正暦の比) 備前国助平ほんめい如此 つかの身そりやすりちとすちかふ つかの身みしかしめ いはめぬきあなの上二うつ 曾我五郎時宗ちゝのてきをうつ時の太刀これか作 ほうしやうのふところ太刀同作也」『鍛冶銘集』等。

\*17 建久二年七月二五日の奥書を持つ『箱根権現縁起』(群書類従所収)に、「又源義経西征之日。奉納利剣于王扉名薄緑。」とあり、義経の佩刀が奉納されたことが明記されている。また、箱根権現では曾我兄弟の太刀が、社の由緒・縁起に取り入れられ広まっていたが、そうした言説の中でも、義経の佩刀が五郎の手に渡ったことが書かれている。鈴木彰「曾我兄弟所持の太刀と『曾我物語』に詳しい。

\*18 五郎の太刀については、鍛冶ごとに伝承が異なる傾向があるようだ。本文中で紹介した「長円」のほかにも注9に挙げた「助平」という鍛冶も五郎の太刀の作者として名が挙がる。長円の伝承はおおむね仮名本に近いが、助平の伝承は義経の佩刀だったという部分を欠き、記述は概ね簡素である。また、『長享銘尽』には「武里 彼作太刀 八幡太郎義家ト 秀安ト 位アラソヒノ時 奥州ノ守護ニフセラルカ様ニテ下向ノ時帯之建久四年癸卯廿八日 親ノ敵ヲ打 其後右大将殿取之」という記述もあり、一つの太刀について複数の説が同じ書物に存在することも珍しくなかったものと思われる。五郎が敵討ちで用いた太刀は一振りのみなので、こうした伝承の錯綜状態は、一つ

の太刀について複数の伝説が存在していたものと考えるのが妥当であろう。源氏重代の髭切をめぐる、鈴木彰は「源氏重代の髭切」を標榜する太刀が複数存在したとしているが、それも一つの太刀について複数の伝承が混在している状態を表しているとも考えられる。

\*19 鈴木彰は前掲論文で、これを「髭切」対「膝丸」の源氏の太刀同士の対決と捉えている。

\*20 真字本では「そもそも何事を存じ、御前近くは参りける」という頼朝の問いに対して五郎は「それは敵と列れて参り候ひぬ(相手が退くにつれて自然と参りました)」と答えている。

\*21 真字本でも同様のやりとりがある。五郎は頼朝に「そもそも頼朝においては、別の意趣をば存ぜざりけるか」と問われて「争かその義はなくて候ふべき。その故をいかにと申し食せ。祖父の伊藤入道は君より御勘当を蒙て、既に誅せられ進せ候ひぬ。敵の助経はまた御気色吉き大名に成て召し仕はれ候ひしに、方々以て意根深く候ひし上に、助成が最後の詞には、便宜吉くは御前近く打上て具に見参に入るべしと申し候ひしかば、現にと千万人の侍共を討て候はむよりは、君一人を汚し進せつつ後代に名をば留め候はむと存じ候ひしかば、……」(笹川祥生・信太周・高橋喜一『真名本 曾我物語』二 東洋文庫 平凡社 一九八八年)と答えている。仮名本はこのやりとりを二度にわけて言わせているのである。また、真字本で、十郎が最後に頼朝の御前へ行き「具に見参に入るべし」と言った部分は、仮



名本では「君の御前に参り、幼少よりの事ども、一／＼に申し  
ひらきて死候へ」となっており、頼朝に危害を加えろと言った  
ともとれる真字本の台詞に比べて、害意のない台詞に和らげら  
れている。

\*22 工藤祐経の屋形へ向かう冒頭の部分で五郎は、「時宗承て、  
「御淀尤にて候へども、とても御寮は、祖父伊藤の敵なれば、  
簾中へ乱れ入、頼朝を一刀恨み申、名を後代にあぐべきなり」。  
…」（新日本古典文学大系『舞の本』）と言っている。幸若では、  
最初から祖父の仇として頼朝にも危害を加えるつもりであった  
ことになっており、五郎の頼朝に対する恨みが明確に描かれて  
いる。

\*23 この文句、誤りが多く意味が通りにくい、元の文句は  
「明哲之君、時有蔽壅之累、俊父之臣、屢抱後時之悲」（『文選』  
五十五、陸子衡「演連珠」）とされている。仮名本はこの前半  
の句によって、頼朝は「明哲の君」であるが、周囲（特に梶原  
景時）の讒言によって誤った判断をしてしまうと嘆いているの  
だが、それは頼朝から梶原景時に責任を転嫁しようとすること  
に他ならない。

\*24 會田実「真名本『曾我物語』の基調構造としての因果連鎖」  
（今成元昭編著『仏教文学の構想』新典社研究叢書九九 一九  
九六年、後に會田実『曾我物語』その表象と再生』笠間書院、  
二〇〇四年、に再収）によると、真名本では惟喬の死後、彼が  
成仏した証拠としてその遺骨が青玉となったというが、それは

惟喬の怨靈化を防ぐことで清和源氏の始祖たる清和天皇の周辺  
から因果・怨念の要素を排除し、源氏から因果の連鎖を断ち切  
るための仕掛けであるという。

JOURNAL  
OF  
THE FACULTY OF HUMANITIES  
THE UNIVERSITY OF KITAKYUSHU  
No. 84      March 2015

CONTENTS

A study of the word “Kudamono-Isogi” used in the Tale of Genji.

A study of the stereotyped tale based on Avalokitesvara Sutra.

A study of the similarities SOGA-no-Goro and MINAMOTO-no-Yoshitsune.

Junko WATASE ..... 1

The Department of Comparative Culture  
The Faculty of Humanities  
The University of Kitakyushu  
2015